

2018年度（第16回） 建築・住宅技術アイデアコンペ

提案タイトル	認知症の人のための在宅の住まいのデザイン －標準パターンと応用－	
提案概要 (200字程度)	認知症の人の数は2012年の推計で462万人、2025年に700万人ほどになると推定され社会の大きな課題になっている。認知症の人は在宅で生活を希望するケースも多いが、在宅での生活を快適にする工夫や、認知症の進行を遅らせる生活パターンが具体的に住環境の形で普及・展開されているとはいえない。また住環境の整備を実務で担うことのできる住宅・建築分野の専門家も育っていない。そこで、認知症の人のための住環境に関する知見を分かり易くパターン化することと、認知症の人の行動、心の状態、残存能力、在宅での介護・医療活動の状況を知ったうえで、一人ひとりに合った住環境の整備を実施できる実務家のための手引きの作成を提案する。	
提案ポイント	①新規性	<ul style="list-style-type: none"> 一般的なユニバーサルデザインはかなり普及してきたが、認知症の人のための住環境のデザインについては、利用者サイドにも、供給側の住宅関係者にもあまり知られておらず、普及しているとはいえない。 十分な知見を持って実践できる専門の実務家も育っていない。 本提案は社会問題解決に向けた住宅・建築分野からの新規性のある提案といえる。
	②実用性	<ul style="list-style-type: none"> 住環境の改善によって認知症の人の生活の豊かさの向上や、症状の進行を遅らせる知見を実装し、社会問題の解決の具体策を提供する 専門家の育成を通じて、社会の課題に対応した分野へ住宅・建築の職能を広げる
	③異業種関連度合	<ul style="list-style-type: none"> 認知症に関する医療・介護分野の専門家との連携 心理学、人間工学分野との連携：認知症の人にとっての「アフターダンス」の追求と実現 家具、什器、インテリア関係との連携
	④建築や社会に対するインパクト	<ul style="list-style-type: none"> 認知症への対応は、社会の大きな課題である。住環境整備により認知症の人達に生活の豊かさを提供し、症状の進行を遅らせることは社会問題への大きな貢献できる可能性がある 住宅・建築の専門家で認知症の人の生活や心を理解して、住環境を計画できる人は多くない。住宅・建築分野における社会から求められる新しい職能の育成につながる

提案タイトル：認知症の人のための在宅の住まいのデザイン

－標準パターンと応用－

【概要】

認知症の人の数は 2012 年の推計で 462 万人、2025 年に 700 万人ほどになると推定され社会の大きな課題になっている。認知症の人は在宅で生活を希望するケースも多いが、在宅での生活を快適にする工夫や、認知症の進行を遅らせる生活パターンが具体的に住環境の形で普及・展開されているとはいえない。また住環境の整備を実務で担うことのできる住宅・建築分野の専門家も育っていない。そこで、認知症の人のための住環境に関する知見を分かり易くパターン化することと、認知症の人の行動、心の状態、残存能力、在宅での介護・医療活動の状況を知ったうえで、一人ひとりに合った住環境の整備を実施できる実務家のための手引きの作成を提案する。

【背景】

認知症の人の数はすでに相当な数にのぼり、現在から近未来の大きな社会問題として認識されている。一方、認知症の実際や認知症の人の心や行動は、関係者以外には必ずしも正しく認識されているとはいえないのではないかと。認知症高齢者の徘徊問題やその結果起こった鉄道事故、盗難の被害妄想、暴言など事件性のある部分が報道され、その印象だけを持っている人が多いのではないだろうか。



「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究」九州大学二宮教授 より作成

提案者の認識も同様なレベルだったが 2018 年に知人の家族がアルツハイマー型認知症と診断され、これをきっかけに書物やセミナー参加によって認知症の実際について学ぶ機会があった。認知症とはなにか、認知症の人の心の状態、残存能力、生活の実感について知ることができた。

そのなかで、認知症への対応は医療・介護関係者だけでなく、住宅・建築関係者にも貢献できる可能性が少なくないことを知った。在宅での生活スタイルや住環境によって、認知症の進行を遅らせる効果があるもの、本人の豊かな暮らしにつながるもの、家族、介護者にとって有効なものなどがある。

さらに認知症の人のための住環境づくりについて調べると、住宅改修についての既往の調査研究もあり、医療介護者へのヒアリングに基づいて、有効な手法についてリストアップされていることがわかった。しかし、そのような既往の研究結果が必ずしも具現化されておらず、一般のユーザーや住宅の実務家に普及しているとはいえない。

【目的】

このような背景のもとに、認知症の人のための在宅での生活を豊かにし、認知症の進行を遅らせる効果がある住環境を具体化するために、つぎの研究を行うことを提案したい：

- ・ 認知症の人のための住環境に関する知見を、住宅デザインやリフォームの形として分かり易くパターン化し、認知症関係者や住宅専門家への普及をはかる
- ・ 認知症の人の行動、心の状態、残存能力、在宅での介護・医療活動の状況を理解して、一人ひとりに合った住環境の整備を実施できる実務家の育成をはかる

【研究会で目標とする成果】

1. 認知症の人のための住環境の標準的なパターン化

認知症の人にとって好ましい住環境について、これまでの研究成果と、研究会でのヒアリング等による新たな知見を、キッチン、寝室、居間、浴室、便所、廊下などの部屋の計画、照明、温熱、遮音などの室内環境、家具什器、色彩、サインなどのインテリアにわけて、標準的なパターンと解説を作成する。「パタン・ランゲージ」C. Alexander, 他を参考にして、実務家はもとより、本人や家族、介護・医療従事者との対話で使えるような分かり易いものとする。

パターン作成においては、既往の研究で指摘されている下記のような諸点を具体化する：

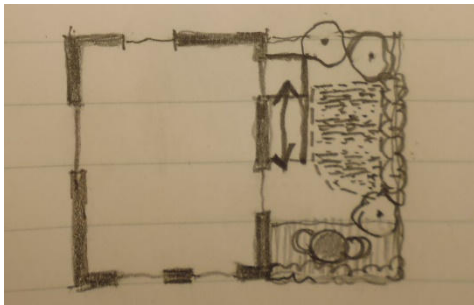
- 認知症の人が見ている世界や心情を前提にした計画：アフォーダンスの実現
- 残存能力や潜在的な能力を発揮できる環境や設備、生活の楽しみ、症状の進行を遅らせる活動を盛り込む
- 基本的な要件としての安全確保
- 本人の尊厳と介護者の作業性を考慮したケアを可能にする

パターンの作成は研究会の中で実施する作業であるが、例えば次のようなイメージである：

◆パターン例1: 植物との触れあえる家庭菜園

園芸や自然とのふれあいは認知症の進行を遅らせる効果があると言われている。家族や仲間と一緒にやる野菜作りは生活の楽しみである。住宅から安全にアクセスでき、囲われた環境での家庭菜園を計画する。

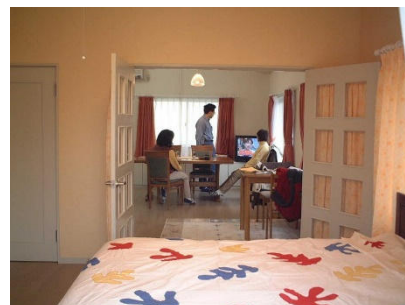
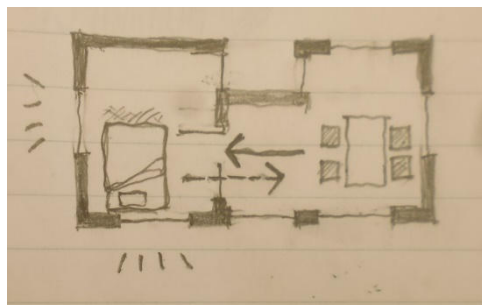
- ・ …………… (計画上のポイントを列挙する)
- ・ ……………



◆パターン例2: 室内に見通しのきくマド

自室と他の部屋や廊下との間の開口を、見通しの効く室内マドにする。家族の様子が感じられることで安心感が得られる。外部から戻った時に自室の位置が確認できて迷うことが無い。家族や介護者にとっても当人の様子をそれとなく見守ることができる。

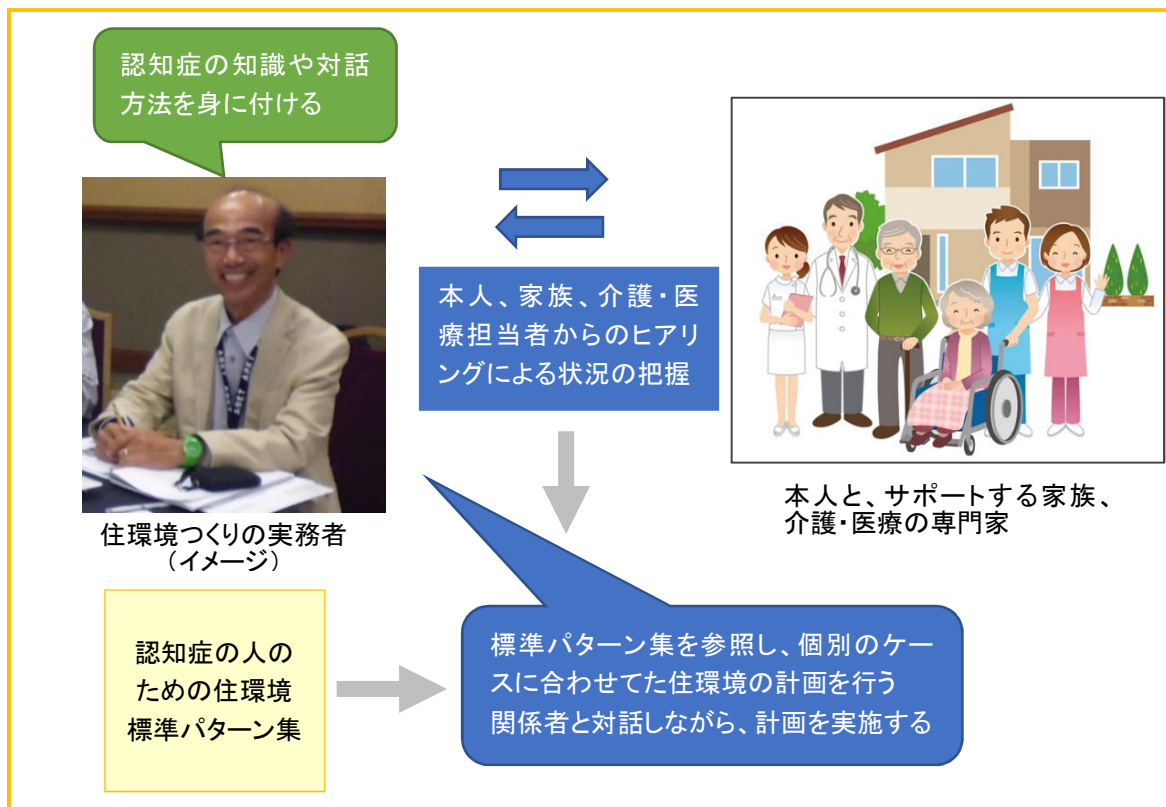
- ・ …………… (計画上のポイントを列挙する)
- ・ ……………



2. 住宅、建築の専門家の育成；実務家のための応用の手引き作成

認知症の人の状態は個々に異なるし、住環境のありかたは同居家族やサポートスタッフの状況によっても違ってくる。住宅作りの実務に携わる専門家は標準的なパターンを参照しつつ、本人や家族、介護・医療従事者と対話するなかから、個々のケースに適した住環境づくりを進める必要がある。そのための手引きを作成する。

- 認知症の人の心を理解し、スムーズにコミュニケーションをとる能力
- 個々の人の状況に合わせてカスタマイズして計画する能力
- 改修の適切なタイミングの理解、経年によって状況が変わることの考慮



【研究会活動】

□メンバー：

提案者（学会会員）、住宅会社、設備会社、家具什器関係、インテリア関係、研究機関、
連携メンバー：医療・介護関係

□活動内容：

- ・ 医療・介護専門家からのレクチャー、ヒアリングで認知症に関する基本的な知識を修得する
- ・ 住環境整備に関する既往の研究の調査
- ・ 標準パターンの検討、個別ケースにおける計画の進め方の検討、資料の作成

□研究会活動の成果

報告書：パタン・ランゲージ集、計画の手引き

【参考文献】

- ・ 高齢者等のための住宅バリアフリー改修の計画手法に関する研究、長谷川洋、国土技術政策総合研究所資料 第825号 2015年2月
- ・ 認知症の人の心の中はどうなっているのか？（光文社新書）、佐藤眞一、2018.12
- ・ A Pattern Language, Christopher Alexander, Sara Ishikawa, Murray Silverstein